

安易に使ってしまう「普通」

関川村立関川中学校 2年 市井 廉太郎

皆さんは、「普通」という言葉にどのようなイメージを持っていますか。「平均的」や「一般的」、「いつも通り」など、その解釈はさまざまです。しかし私は、日常のコミュニケーションにおいて、この「普通」という曖昧な言葉を安易に使いすぎるべきではないと考えています。その理由は、この言葉が含む「危うさ」にあります。

辞書を引くと、「普通」とは「特に変わったところがなく、一般的でありふれてること」と定義されています。しかし、これを日常会話で使おうとした瞬間、言葉の持つ意味は途端に曖昧になり、伝わり方に大きな個人差が生まれます。

私には、この言葉の曖昧さが原因で、母と言い合いになった経験があります。ある日の朝食のことです。朝食で出された料理が多く残ってしまいました。それとは別に、母は私が夜にサッカーへ行く前の食事を、作り置きしてくれていたのですが、私は朝の残りを無駄にしたいと考え、「今日の夕方、普通にこの残りを食べていくね」と言いました。すると母から、「普通って何のこと？」と少し強い口調で返されてしまったのです。

私にとっての「普通」は、「動けなくなるから、サッカーの前に満腹にはしない」という考えでした。しかし、母の「普通」の解釈は、「作ったものはしっかりと食べきる」という考えでした。自分と母の基準が必ずしも同じではないという事実が、このすれ違いを生んでしまったのです。

日常でも「普通はこうするよね」という言葉が、相手に価値観の押し付けや同調圧力として伝わり、人間関係のトラブルに発展するケースは少なくありません。「これって、普通だよね」「普通はこうなるよね」などと言われ、何も感じない人もいれば、その人の感じ方や当たり前を押し付けられているように感じる人もいるかもしれません。「普通」という言葉の基準は一人ひとりみんなが違うのです。

それでは、私たちは「普通」という言葉を一切使うべきではないのでしょうか。私はそうとは思いません。この言葉には「いつも通り問題なく」という明確なニュアンスもあり、私たちの会話を円滑にする側面もあるからです。自分の思う、世の中の「普通」を表現できる言葉だからこそ、大切に使うべきなのです。

つまり、使い方への「意識」の問題だと思います。人にはそれぞれ、育ってきた環境や経験、文化の違いがあり、何が「普通」かは千差万別です。したがって、自分の基準を全ての基準だと思い込まず、お互いの異なる基準を尊重し合う姿勢が不可欠です。

例えば、先輩から「普通にこれだけ勉強すれば合格できる」と言われ、その量に圧倒されてしまったとしても、相手の「普通」に縛られる必要はありません。相手の基準を一つの目安として尊重しつつ、自分のペースという「普通」も大切にすればよいのです。

今、社会では多様性という考え方が広がっています。人種や文化、考え方が違う人たちが

複雑に混ざり合うようになった今の多様な社会でこそ、この「普通」という言葉について改めて考えてみるべきです。そして、一人ひとりの「普通」という価値基準が異なるということを、私たちはお互いに理解し、尊重し合う必要があります。自分にとっては普通ではない。しかしそれは相手にとっては普通のことかもしれない。お互いが自分の普通を押し付けるのではなく、理解し、受け入れ、尊重し合う。それが本当の意味での多様性なのだと思います。

「普通」という言葉は、時に便利な道具となりますが、時に他者を否定する言葉にもなり得ます。だからこそ私は、お互いの多様性を尊重しながら、あの朝食の時のように曖昧な言葉に逃げるのではなく、自分の考えを責任ある明確な言葉で表現できるよう、日々心がけていきたいと考えています。

「私とあなたの普通は違うかもしれない。」この想いをこれからも大切にし、他者を尊重できる人間に、私は成長していきたいです。